

政治家の劣化を招いた戦後教育（２）

「尖閣諸島の帰属に関して日中間で話し合う」と口走った鳩山前総理に、国家意識はあるのか。

「国家の否定」から出発した戦後教育

菅内閣は、政権担当直後の一時的な支持率回復を奇貨として、国家審議を早々に切り上げ、参議院選挙にもつれこみたいようである。マニフェストを回（めぐ）る「債務不履行」などどこ吹く風、選挙に勝ちさえすれば、後は野となれ山となれという所であろうか。

自民党が消費税10パーセント論をぶち上げたのには驚いた。子ども手当、高速道路の無料化等々、バラマキマニフェストが積み重ねられている真っ最中に消費税値上げを主張するのだから、その「人の良さ」には呆れてしまう。

片や政党エゴイズムの権化、片や政治的無能力の純粹結晶、我が国の政治家はどうしてここまで劣化してしまったのであろうか。戦後教育のどこで我々は道を誤ったのであろうか。戦後教育は、「国家の否定」から出発した。私の学校の体育館に、「人間尊重」という巨大な額が掲示されている。ある地方政治家の揮毫（きごう）したものである。しかし「人間尊重」とは何事か。そんな事は当たり前の話ではないか。何故そんな当たり前のことを掛け軸にしてまで掲示しておくのか。

実はこれは国家に対するアンチラーゼなのである。本来、国家なくして個人など存在できないのだが、国家と個人を二律背反として捉え、国家を全面的に否定することが戦後イデオロギーの出発点であった。

白人列強は、アジアアフリカ各地において横暴、陵虐の限りを尽くした。各地の民衆はそれなりの抵抗を試みたが近代的生産力、軍事力に支えられた白人列強への抵抗は、強力なものとはなり得なかった。列強にとっては蚊に刺された程度のものだったかも知れない。

だが大東亜戦争における日本の抵抗は、文字通り彼らの心胆を寒からしめた。ハワイの急襲、イギリスの「不沈艦」プリンス・オブ・ウェルスの撃沈。白人列強はアジア、アフリカの一角に、彼らの存在を根底的に揺るがせるエネルギーが存在することに周章狼狽（しゅうしょうろうばい）した。

「このように危険な国家、民族は、軍事的にだけでなく精神的にも武装解除しなくてはならない」これがアメリカ占領軍が日本を「統治する」に当たっての基本姿勢だったであろう。

占領軍は「アメリカ教育使節団」を送り込む等、様々な方法で日本人のイデオロギーを根底的に変革する策略を積み重ねた。教育「改革」は、その最も重要な分野であった。

これに抵抗する姿勢を見せるイデオログに対しては、新聞ラジオの徹底検問のほか、公職追放の鉄槌（てつつい）が下された。経済が極度に疲弊し、転職の可能性など全くない中で公職追放なのだから、日本中の公務員、特に教師の恐怖感はひと通りのものではなかつ

た。

私は昭和26年、1951年に、高校を卒業すると同時に中学校代用教員として奉職したのだが、そんな幼い私でさえ、極めて詳細な「適格審査」なる書類を作成提出しなければ公立学校教員になることができなかった。

そして、アメリカ占領軍の要求以上にアメリカ的であろうとする醜い日本人が巷(ちまた)に溢れた。彼らは、自分たちはまるでこの戦争に関わりがなかったかのような顔をし、「戦後イデオロギー」を振り回し、権威ある者のごとくに振る舞った。あの不快感は今も忘れることができない。

「英雄」なき時代

個人主義とは、価値の根源を個人に置く理念である。我々は毅然として個人主義の立場に立たなくてはならない。しかし、その大切な個人も国家なしに存在できるものではない。国家こそは個人の存立基盤であり、国家と個人は、決して背反するものではない。

しかるに戦後思想は、この個人と国家とを二律背反として捉え、個人を絶対善とし、国家を絶対悪として捉えることを特徴とした。

各種の映画やドラマも、国家を悪として捉える姿勢を貫くことが多かった。戦前戦中、当時の国家に抵抗、反逆した人物を英雄と捉える傾向が支配的であった。多くの作品で、特高警察を悪の権化として描き、これに抵抗した人物をドラマの「隠し味」にするような傾向が存在した。藤田進演ずるところの「我が青春に悔いなし」などは、その典型であった。テレビドラマ「おしん」にすら脱走兵が登場して美化され、これを追う特高警察が悪の象徴として描かれた。

かつて国際共産主義は、ソビエト擁護のためコミンテルン(国際共産主義組織)を結成し、共産主義者は、戦争に際しては、母国の勝利のためでなく、ソビエトを擁護する事を第1義的任務とする方針を打ち出した。レーニンの「帝国主義戦争を内乱へ」という言葉は、端的にその消息を物語っている。そのように緊迫した国際情勢の中で治安維持法が制定された。特別高等警察も、当時必要な組織であったし、その活動も戦後伝えられたものと異なる面が少なくない。しかしすべては、戦前の我が国の歴史が間違っただけであることを強調するという一点から宣伝され続けた。それは現在も継続されている。

個人は善で国家は悪、外国は善で日本は悪、このステロタイプが戦後65年を経た今もてなお反復継続され、床の間に居座り続けているのである。

安全保障問題に関しても、この、外国は善で日本は悪というステロタイプは、政治に致命的影響を及ぼしつつある。テレビで「すべての基地をなくし、沖縄を平和の島にする」と語った「沖縄県民」がいたが、「我が国の軍事力をゼロにすれば平和が来る」という理念ほど近隣大国を喜ばせるものはない。これこそが「平和闘争」「平和攻勢」の本質である。

「尖閣諸島の帰属に関して日中間でよく話し合う」などと鳩山前総理は口走ったが、自国の領土の帰属について、他国と何を話し合おうというのか。国境線は軍事力によってしか維持できないという悲しい現実が、この天真爛漫な総理の念頭からは完全に欠落してしまっ

ている。前総理ではなく、当時彼が「現総理」であっただけに、政治家の資質的低落などと詠嘆してはいただけないと思うのである。

英雄とは、国家社会のために己を犠牲にすることを恐れない人物である。国家の意義が根本的に否定される時代にあつて英雄など存在できるはずがない。

しかし戦後教育は、この「英雄否定の理念」実現に終始した。道徳教育に登場する人物も、英雄ではなく、向こう三軒両隣にちらちらする、ごく普通の人物に限られる。英雄は国家と結びついていることが多いし、それに「どことなく胡散（うさん）臭い」のである。かくして小中高等学校の教育から「日本人の英雄」は完全に放逐された。

国家のために己を犠牲にするのが政治家

政治家は、国家のために己を空しうできる人物でなくてはならない。鈴木貫太郎に始まり吉田茂、岸信介等々、戦後の日本は、数々の英雄的政治家を輩出させた。しかし戦後教育は、これらの英雄を小中高校生に、その目指すべき人間像として描くことを回避した。

私の学校には、ネルソンと並んで東郷平八郎の大きな肖像が掲示されている。今そのような学校は全国にも少ないのではあるまいか。

自己犠牲を恐れず、信念のおもむくままに突進するのが人間の本性である。事実、阪神淡路の災害に際しては、全国の数多くの若者が、犠牲を恐れず被災者の救出に献身した。駅のホームでの転落事故に際しても、意外と言えるほど人々はその救出のために危険を冒している。だが、「小さな親切」と同類に属するような活動において人々は英雄的に行動するが、事、国家に関する限り、その動きは極めて消極的になってしまうのである。国家が悪の権化として描かれた戦後イデオロギーが、人々の心に深く根を下ろしてしまっているからである。

総理になったら、国家のためには死んでもいいと思うのが人間の姿だと私は考えていた。しかし、どうも最近の総理は、そうでもないようである。

菅新総理が、審議もそこそこに国会を閉じ、人気のあるうちに参議院選挙を終わってしまおうとする姿勢は、政権さえ維持できれば、国家国政などどうなろうと構わないという本音の表れであろう。公約のほとんどを実現できず、その事実について謝罪もしないのだから、そこには国家、国民に殉じようとする姿勢の片鱗（へんりん）もない。

同じ事は自民党の谷垣総裁についても言える。政権党の公約違反、バラマキ累積を食い止める見通しが立たない状況で、消費税値上げを唱えるなどは、野党党首としての当事者能力を欠落したものである。国家のためには大島幹事長と共に、自民党執行部を直ちに立ち去るくらいの思慮、決断がなくてはならない。彼にあつても大切なのは国家ではなく「私」なのであろう。

今日の政治家のほとんどは戦後教育の中に育った人々である。その彼らに国家意識を求めること自体、既に過酷な要求であるのかも知れない。いかにして学校教育の中に、適正な国家意識育成を復活させるか、そこに我が国の存亡がかかっていると私は思うのである。

祖国と青年 7月号「教育再生への提言」掲載

(平成 22 年 9 月 16 日)